ホイットマン教説の輪郭　その二

清水春雄

（小論前段一―四は小樽商科大学創立五十周年記念論文集にあり）

五　友　愛

一切のものが同じ霊を頒け合っているというホイットマンの立場からすれば、人間同士が互いに惹き合うのは当然のことと考えられるのであって、彼はその惹き合う力を愛と見、異性間の愛を恋情（amativeness）、同性間の愛を愛着（adhesiveness）と呼んだ。「アダムの子等」の詩群は異性間の愛を主題としたものであるが、その歌うところは所謂情痴の世界や、恋愛の喜びや悲しみなどではなく、自然の理としての異性間の惹き合いである。それは性の自然であって抑えたり止めたりすることのできるものではなく、その点において食欲や死と同様、決して卑しいものではないとの立場をとる。[1] 彼のこの男女間の愛は生理的な性愛とでも称すべきものである。彼は「一人の女が私を待つ」という詩の中で、「若し性が欠けていたならば、或は若し適当な男の潤いが欠けていたならば、一切が欠けているのだ」[2]と歌っているが、これについてD・H・ロレンスが「ホイットマンには顔はいらぬ。『女性が私の男性を待つ』というべきだ」[3]と評している。この評は的を射あてているのであって、「草の葉」に普通の意味での恋愛詩の見当らぬ理由が察せられるであろう。

彼には「清浄な愛の大地、愛ある生命のみが真の生命、／わが愛人の肉体、私の愛する女の肉体、男性の肉体、大地の肉体」[4]等の句があって、生理的な交渉の描写もあるが、毛深い野蜂と満開の雌花との関係を愛欲の悩みとして描いている程度のもので特に煽情的とは言えない。「私はエレキに充ちた肉体を歌う」[5]や「堰きとめられて疼く河から」[6]等はその題名の意味するままであり、「私は愛欲に悩む者だ」[7]という歌も、特定の女性を対象とするものではなく、「地球は引力で引きつけてはいないか、あらゆる物質もまた悩み他のあらゆる物質を引きつけはしないか、／同じように私の肉体も私が会い、或は知るあらゆるものをそうするのだ。」と歌う。彼はまた「申分なく心地よい原始的な頑丈な腰部の持主たる自分、強靱にして性器崇拝の／私こそはアダム風の歌の歌い手／……『性』のうちに私自身を浴みさせ、私の歌をも浴みさせ／私の腰部の所産を捧げる。」[8]と歌っているが、これらのように性を思わしめる歌は「アダムの子等」の領域に入れている。従ってただ愛し慕うという抒情性をもつ歌は同性間の或は人間同士間の惹き合う心情を表わしたもので、そういう愛を前述の如く adhesiveness とか manly love 或は athletic love とか言っている。

友愛の詩群として知られる「カラマス」の冒頭で、

男性的な愛着の歌以外は歌わぬことを今日決意した、
それらの歌を実在の生活に沿うて写し出し、
これから後は力強い愛の型を伝えることとする。[9]

と歌っている。カラマスというのは北米産の一種のしょうぶであるが、「私を措いて誰か僚友の詩人たるものがあろうか。[10]」と自認するホイットマンが、親しい友の精霊にとりまかれて春の野を漫歩している時、僚友の最適の記念として池畔の水中から引き出した草の根であり、男性的な愛の象徴である。

カラマスについてはキャンビーは、「男根状の固い葉と、男根状の根をもつ野生のしょうぶ」[11]であると言い、アレンは「湿地に生えて男根状の花と丈夫な長い葉をもつ、香のよいしょうぶの一種」[12]と言う。両者の説に食い違いはあるが、男根を思わしめる形状がどこかにあることは確かであろう。しかしホイットマン自身は、ロゼッテイの問に答えた手紙で、「こちらでは極く普通の草で、香があり丈は三フィートぐらいもある。私がこの本のなかで用いた凝った霊妙な意味合いは、カラマスが最大最強の葉をもち、新鮮なつよい芳香を放つ花がつくところから来ている」[13]と述べ、特殊の形状については何も語っていない。

ホイットマンはこの詩群の中で、自分は微力のために、人のため世のため、これという貢献はできないがただ愛の歌だけは残すことができると言って、「私は何の発明もしたことがない、／病院や図書館をたてる多額の遺贈も私にはできそうもない、／アメリカのためにした勇ましい勲功の思い出もない、／文学的成功も智力も書棚を飾る本も持たない、／しかしただ大気を通じてゆれ響く幾篇かの歓びの歌を私は遺す、／僚友と愛人たちのために。」[14]と歌っている。このカラマス詩群中には同性愛的な表現を伴いそれが非難のもととなっている詩篇もある。実際生活において妻をもたず、友として時には父性愛的愛情を傾けて我が子の如く愛した相手もあるので、疑われる表現があっても止むを得ないと思う。しかし元来、霊魂が通うものとして、しかも霊肉一致を信ずる彼にとっては、愛着は純粋に精神的に留まり難い面があったのであろう。

特定の個人を想わしめる例を見れば、「おお、君よ、一緒におりたいため君のところへ屢々密かに訪れる、／君と並んで歩く時、或は傍近く坐る時、或は同じ部屋に留まっている時、／私の身休の中で、霊妙な電気の火が君のために燃えるのを君はまるで知らないのだ。」[15]「男女の群集の中に、私は秘かな神業のような合図で私を選び出す者があるのを認める。」[16]「時々、愛する人と共にいて、私は報われぬ愛を注いでいやしないかと、憤りで心が充たされること

がある。[17]」「冬の夜、おそく、酒場のストーブを囲んだ一群の労働者や御者の群に交って、私が人目につかずに隅に腰かけていた、／私を慕い、私が愛している青年が、静かに近ずき、私の手をとるように傍に坐った……／私たち二人は一緒にいることで満足し幸福で、余り話さず、いや、恐らく一言も話さずにいた。[18]」というのがあるが、このような種類は極めて数少なく、大部分は一般的な抽象的な述べ方である。例えば「すべての形而上学の基礎は愛である。[19]」「私の記録するのは堂々たる軍鑑や……過ぎた日の華やかさや大都会の繁栄振りではなく、波止場で親しい友達との別離を惜しむ平凡な人たちだ。[20]」「英雄のかち得た名声や偉大な将軍の勝利を思う時、その将軍らを羨まぬ、栄職にある大統領も大邸宅に住む富豪をも羨まぬ、しかし愛する人達の友愛が一生を通じて渝ることのないのを羨む。[21]」などという意の一般的な表現が多い。

ホイットマンにおいて特有な愛は、見知らぬ人に対する愛情である。彼の性来の人なつこさの根元を探って見よう。

通りがかりの見知らぬ人よ！　君は私がどんなに慕わしげに君を眺めているかを知るまい、
君は私が求めていた彼であり、求めていた彼女であるに違いない、（夢のようにそう思われる、）
私はたしかに何所かで君と歓びの生活を一緒にしたのだ、
のびやかに愛情に溢れ、清浄に円熟して私達が互に行き違った瞬間、すべてが思い出される、
君は私と一緒に成長した少年であり、私と一緒にいた少女であった、
私は君と共に食べ共に眠った、君の肉体は君だけのものではなく、私の肉休は私だけのものではなくなったのだ、[22]
こういう目で見るのであるから、

見知らぬ人よ、君が通りがかりに私に会って話しかけたいと望むなら、どうして私に話しかけて悪いのか、
また、どうして私が君に話しかけては悪いのか。[23]

と歌うのは当然である。未知の人をなつかしく思うのは魂が流れていると見るからである。「ここに魂の流出がある、／……このように突然に私が未知の人との間に取り交わすものは何か、／私が御者の傍の席に乗っている時、彼と取り交わすものは何か。[24]」「おお、人間の霊魂のみが生み出して、不断に際限なく洪水の如く射出できる人間の未来の共感の喜び。[25]」この共感に結ばれる親しさを描いたものに、ブルックリンの渡船場で落日の光景に見入りながら、過去の人も未来の人も心を同じくしてこの光景を眺めているであろうという感慨がある。

時も所も役にたたない――距離も問題にならない、
君達、ある時代の、また、これから幾時代か後の男と女よ、私は君達と一緒にいる、
君達が河と空とを眺めて感ずるように、私もその通りに感じたのだ、[26]

この時空を超えた共感の考えは、次のように繰り返される。「私の見た男女の人達はすべて私には親しいものであった、／他の人達も同じだ――私が彼らを予見したから、その人達はいま私を回想するのだ。[27]」「私の顔をみつめる男や女に私を結びつけるこのものより、より勝って微妙なものが他にあり得ようか、／それはいま私を君達の中に融けこませ、私の意味することを君達の中に注ぎ入れるのだ。／こうして私達は互に理解し合っているのではないか。[28]」自然の景を中心に魂の交流を想う詩人は、やがて自己の詩を通じて自己と読者との霊の交流を想う。「私の詩を読む人達よ、私が人知れず君達を眺めていやしないかと想って見給え。[29]」

渡船場の歌以外でも、「また、こうしている間にも私の魂は君を抱擁しており、また私達はお互に一度も会いもせず、恐らく永遠に会うこともなくて、互に慕いあうということは全く素晴らしい。[30]」と歌っている。この句は「草の

葉」初版から現われており、後に「私の教訓を完全に学びとるものは誰か」という題のつけられた作品の中にあることから考えても、この詩人にとって重要な関心事であることがわかる。かけ離れた人々についての共感の思いでは、次の句が優れている。

ただ独り坐って、あこがれと想いにふけっているこの瞬間、
他の国々で同じように、あこがれと想いにふけっている人達がいると、私には思われる、
……
ああ、私達はみな兄弟であり、そして愛人でなければならないことを私は知っている、
彼らと共にあれば、私は当然幸福であると知っている。(31)

これは距離のへだたりであるが、時間のへだたりでは、先の渡船場の歌に類する考えが随所に現われている。カラマス詩群結びの歌ではこう言っている。「いま人生の真っ盛り、引き締った身休で姿を見せている、／合衆国の第八十三年、年齢四十才の私は、／いまから一世紀か幾世紀の後の人、／まだ生れて来ぬ君を求めてこれらの詩を。／君がこれらの詩を読むとき、姿を見せていた私は目に見えなくなり、／こんどがっちりと姿を表わすのは君で、君は私の詩を理解し私を探し求める、／そして私が君と一緒にいて、君の仲間となれたらどんなに楽しいかと想って呉れるだろう。／私が君と一緒にいるものと思うがよい。(32)」

彼の詩篇の理解者を未来に期待しているのであるが、未知の読者との心の繋りを考えている作品には、「（君達、遠くに距ったおぼろな未知のもの――若き、または老いたる――これと定め難き無数の親愛なる読者達、／私達は曾て会ったこともなく、またこれからも会うこともないだろう――それでいて私達の魂は永くしっかりと抱きあっている。(33)）」という晩年感謝の言葉もある。「後世の記録者達よ」と呼びかけた詩では現実と半ば希望をこめた自画像を描

いて歌う、「その人は彼の歌を誇りはしなかったが、彼のうちに抱く涯しない海のような愛を誇り、そしてそれを惜しみなく注ぎ出した、／その人は親しい友達を、愛人たちを思いながら、屢々心淋しく散歩した、／……その人が街をぶらつく時、屢々彼の腕を友の肩にかけており、その間、友の腕はまた彼の肩においてあった。[24]」

友愛強調の彼の希いは、僚友の男性的な愛をもってデモクラシーを生むことである。

牢固たる大陸を造ろう、
私は太陽がこれまで照したことのない最もすばらしい民族を造ろう、
私は神々しい魅力ある国土を造ろう、
僚友の愛をもって
僚友の終生渝らぬ愛をもって。[35]

彼はまた、「わが合衆国の主要な目的は、曾て知られない優れた友情と歓喜を創り出すことだと信ずる。[36]」とか、合衆国の西部への異常な発展のために「健全なアメリカ風の愛情を教えよう。[37]」とか述べて、一見国家本位にも見られるが、真意は全人類がデモクラシーに結ばれる段階として、先ず自国が見事な実験を果たすことを希っているのである。彼は歌う、「私は或る夢で、世界の他のものがこぞって攻撃しても、陥し入れることのできない一都市を夢みた、／私はそれが『僚友』から成る新らしい都市であることを夢みた、／そこでは健全な愛の特質より偉大なるものはなく、それは世界を指導するのであった。[38]」夢の序に言えば、自由に平等に世界の人々が結ばれている姿を、次のように夢みることのできる彼でもあった。「眠る人々が衣服をつけずに寝ているところは非常に美しい、彼らは素裸で寝ている間に、東から西へと全地球を、互に手をとって流れてゆく、アジア人とアフリカ人と手をつなぎ、ヨーロッパ人とアメリカ人と手をつないでいる。[39]」

(1) *Song of Myself*, 24.
(2) *A Woman Waits for Me !*
(3) D. H. Lawrence, "Wh.tman," *Selected Essaye.*
(4) *Spontaneus Me.*
(5) *I Sing the Body Electric.*
(6) *From Pent-up Aching Rivers.*
(7) *I am He that Aches with Love.*
(8) *Ages and Ages Returning at Intervals.*
(9) *In Paths Untrodden.*
(10) *These I Sing in Spring.*
(11) Henry Seidel Canby, *Walt Whitman : an American*, p. 182.
(12) Gay Wilson Allen, *The Solitary Singer*, p. 235.
(13) Ibib., p. 386.
(14) *No Labor-Saving Machine.*
(15) *O You Whom I Often and Silently Come.*
(16) *Among the Multitude.*
(17) *Sometimes with One I Love.*
(18) *A Glimpse.*
(19) *The Base of All Metaphysics.*
(20) *What Think You I Take My Pen in Hand?*
(21) *When I Peruse the Conquer'd Fame.*
(22) *To a Stranger.*
(23) *To You.*
(24) *Song of the Open Road*, 7.

(25) *A Song of Joys.*
(26) *Crossing Brooklyn Ferry*, 3.
(27) Ibid., 4.
(28) Ibid., 8.
(29) Ibid., 9.
(30) *Who Learns My Lesson Complete?*
(31) *This Moment Yearning and Thoughtful.*
(32) *Full of Life Now.*
(33) *Thanks in Old Age.*
(34) *Recorders Ages Hence.*
(35) *For You O Democracy.*
(36) *To the East and to the West.*
(37) *A Promise to California.*
(38) *I Dream'd in a Dream.*
(39) *The Sleepers*, 8.

六　デモクラシー

「草の葉」はデモクラシーのバイブルであるとも称せられるが、ホイットマンはこの言葉をもって大衆が平等意識に立って互に個人の自由を犯すことなく、友愛をもって固く結ばれた状態を考えている。詩集巻頭の歌で、「私は『民主的』という言葉、『大衆と共に』という言葉を口にする、(1)」と言い、「自己の歌」で、「私の言葉は現代人の言葉、『大衆と共に』という言葉だ。(2)」と繰り返している。「銘詞」群中の「諸外国へ」では、「『新世界』というこ

の謎を解き、／アメリカとその力強き『民主主義』を解きあかすべき何ものかを君たちが求めていることを私は聞いた、／それ故に私は君達が望むものをその中に見出すようにと私の詩篇を君達に贈る。[3]」と明言しているので、詩集「草の葉」が同胞はもとより異邦の大衆にも、デモクラシーの真意を理解させるために歌われたものであることが解る。

「大衆」を彼は屢々聖なる平等人 divine average と呼んでいるが、もとより、一般普通の人々 common men を指す。「ありふれたものを私は歌う。／……戸外の大気を私は歌う、自由を寛容を、／（ここで最も肝心な教訓を学びとり給え――書籍からはより少く――学校からもより少く、）不断の昼と夜と――ありふれた大地と水とを、／……堅牢な大地がすべてのもののためにあるように、それらの下にデモクラシーの知性がある。[4]」と歌うこの趣旨によってみられる普通の人々である。そういう普通の人々に彼は限りない健全性を認める。「東部の或は西部の、都会或は田舎の、無数の名も知られぬ健全な人達、／自分らの善良さを意識しない君達の黙々たる母、姉妹、妻、／……君達のうちにある確かな深い誠実さの永久的な基盤。[5]」一般普通人の礼讃として、次の「ブルックリン渡船場を渡って」の中の句がよく知られている。

不断着の男女の群よ、君達は私にとって何と珍しく見えるのだろう！
渡し船で渡しを越えて家路につく幾百また幾百という人達は、君達の想像以上に私には珍しいのだ。[6]

この平凡性尊重の心からみれば、「市民が常にその主権者であり、また理想的なものであって、／大統領や市長や知事などという人々は、給料を支払う代理人に過ぎない。[7]」という句も、頷けるわけである。その庶民意識は所謂教養主義を排して、「よろい戸をつけた部屋や学校は私と交渉を持つわけにはいかない、／……若い機械工が私には一番親しい[8]……」樵夫、農夫、漁師、水夫等が仲良しだと叫ぶ。「機関の扱いや商業の勤労の中に、また田畑の労働

の中に、私は発展を見出し、／また永遠の意義を見出す。[9]」と歌い、各職業の日常生活の中に「立派な発展があり――それらの中にあらゆる主題と示唆と可能性とがある、[10]」として、家事にいそしむ人々の歌と同じく、各種の仕事に働く職人の歌を聞き、「私はアメリカの歌を聞く、さまざまな歓びの歌を聞く、[11]」と言う。

デモクラシーの理想的な平和な生活は、彼の空想の中で、例えばリンカーンの墓所の壁画として、たけゆく春の農園風景、黄金色の夕映につつまれて家路をたどる労働者や、家庭の情景などに描かれている。[12]

ホイットマンはもとよりデモクラシーの実現の容易でないことを充分に心得ている。「水碧きオンタリオ湖畔にて」の中で、祖国が詩人に呼びかけるものとして、「デモクラシーの陣痛の歌を歌ってくれ、（運命づけられた征服者たるデモクラシーよ、しかも到る所に当にならぬ表面だけの微笑があり、／一歩毎に死と不信とがある。[13]）」と言い、また、祖国の歩みに楯つくものを見て、「『一切の母』に向って狂気の刀を振って襲いかかるのを私は見た、[14]」とも言う。しかし如何なる苦難を凌いでも遂にデモクラシーの勝利の日の到来を信じている彼は、「必死の執念深い様相をしてデモクラシーの濶歩するのが、稲妻のきらめきで暗闇の中に見える、[15]」のであり、「デモクラシーよ、到る所で武器が君の胸にさし向けられている時、／私は君が静かに不滅の子らを産むのを見、夢の中に君の拡がりゆく姿を見、／その拡げたマントで世界を覆っている君を見た、[16]」と、揺ぎなき信念を明らかにしている。

南北戦争の如きデモクラシーの最大の危機に当っては、従来アメリカは余りに永く、平和な坦々たる道を旅したので、歓喜と繁栄とだけから学んだ、今は苦難から学ぶ時だ、恐ろしい運命と取組むべき時だとして、「今こそ君の国民大衆の真価を考え、これを天下に示すべき時だ、／（私を除いて他に誰か君の国民大衆の真価を考えたものがあったであろうか、[17]）」と大衆を歌う自己の使命を自負している。

デモクラシーを歌うのこそわが使命であるとして、将に生れ出んとするデモクラシーを雛鳥に譬え、「デモクラシ

ーよ！君の間近かに一つの咽喉が、いま一杯に膨んで、嬉しげに歌っている。[18]」と言う。デモクラシーの現在と将来のために力強い誇らかな歌を歌うというのである。そして諸州を有機的に結ぶものは詩人の力であるとして、かかる詩人を待望する声のあるのを聞くと言う。「完全に生え抜きの雄大な彼ら詩人達によって、彼らによってのみそれらの諸州が、一国家として引き締った有機体に溶け合わされるのだ。[19]」しかもアメリカの詩人としては特に、「君は一切の封建時代の過程と詩篇とを棄て去って『デモクラシー』の過程と詩篇とを我がものとした人々を見たか、[20]」と新しい詩、旧世界的の詩形や詩想からの脱却を説いている。

デモクラシーの想いは、ひとりアメリカのみに限るのではなく、

常に先だつ、ひとつの想い――

それは世界という「聖なる船」に乗り、「時間」と「空間」とを衝いて、

地球上のあらゆる民族がともにゆき、おなじ航海を続け、おなじ目的地に向うということ。[21]

と世界的なデモクラシーの意は瞭然としている。彼は人類についての自然の意図を次の如く解している、「私は長い間、『意図』を探し求めて来た、／……それは図書館の本にも……伝説にもない、／それは現在のうちにある――それはこの大地だ、／それはデモクラシーの中にある――（これが一切の過去の意義であり目的である、）／それは今日住んでいる普通人の、一人の男、または女の生活なのだ。[22]」

ホイットマンの散文の代表作に「民主主義展望」*Democratic Vistas* (1871) がある。これは、南北戦争後、一応政治的の融和はなり、物質的繁栄は齎せられたが、彼の理想とするデモクラシーとは程遠いものであったので、道義的国家の建設の要を痛感し、その促進のため民主主義的文学の誕生を声を大にして叫んだものである。彼は人間性の完成を希い、そのためにこそデモクラシーの成就を悲願としている。暗示的な間接な表現をとるという彼のことである

から、その詩作品中に彼の理想とする民主社会の姿は明かにされていないが、その晩年の随筆『新世界の民主主義』[28]の中に、好ましきものとして、チャールズ・キングズリーの次の言葉を挙げている。キングズリーはイギリスの宗教家で文学者であり、ホイットマンとは同年齢であった。「人間社会の理想的な形態はデモクラシーである。神と自然とに対し、自由な額を挙げる自由の人々からなる一国民――でき得れば全世界。主はただ一人、神なるが故に何人をも主人と呼ばず、宇宙の創造者に対する務めを知って行い、それ故にまた各人相互の務めを知って行い、恐怖や利害の計算からではなく、正義と信頼と平和が美しいものであるがために行う。神の掟が心のうちにあるがために行う。かような国家、かような社会――これより崇高なる道義的存在のいかなる概念を、われわれが抱き得ようか。それこそ地上にもたらせられる神の王国ではなかろうか。」

ホイットマンならば勿論、「主はただ一人、神」という表現を用いないわけであるが、しかし彼はこのキングズリーの言葉に共鳴して、これを引用した後に、「かかる理想に打ち建てられた信念を、われわれは守り通さねばならない。それにしても、今日わがアメリカのデモクラシーが実際にあらわしているものは、何たる光景であろうか。」と慨歎している。尤も彼は決して失望してはいない。アメリカなる国家が一つの実験であると言い、また、デモクラシーの胃の腑は、自然の胃の腑と同様、広大無辺な防腐力をもっており、病源体を含むものも消化して、生命に対する滋養物に変えるものと信じているのである。

(1) *One's Self I Sing.*
(2) *Song of Myself*, 23.
(3) *To Foreign Lands.*
(4) *The Commonplace.*
(5) *Nay, Tell Me Not To-day the Publish'd Shame.*

(6) *Crossing Brooklyn Ferry*, 1.
(7) *Song of the Broad-Axe*, 5.
(8) *Song of Myself*, 47.
(9) *A Song for Occupations*, 1.
(10) Ibid., 5.
(11) *I Hear America Singing.*
(12) *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd*, 11
(13) *By Blue Ontario's Shore*, 1.
(14) *Virginia—the West.*
(15) *Rise O Days from Your Fathomless Deeps*, 2.
(16) *By Blue Ontario's Shore*, 17.
(17) *Long, too Long America.*
(18) *Starting from Paumanok*, 12.
(19) *By Blue Ontario's Shore*, 9.
(20) Ibid., 12.
(21) *One Thought Ever at the Fore.*
(22) *I was Looking a Long While.*
(23) "Demoracy in the New World," *Notes Left Over.*

七　宗　教

ホイットマンは「草の葉」第五版（一八七二年）の序文で、この詩集は版毎に改訂されているが、宗教的目的は最初から変化がなかったと述べている。しかし第一、二版には、各民族各宗教という如き表現以外は特に宗教という言

葉を用いている箇所は全くなく、第三版に現われた *Starting from Paumanok*, 7 の中で初めて、「一派の宗教を創める」という句を用いているのである。初めの間は恰も宗教という語を避けているかの如き観がある。これは或は特定の既成宗教と受取られる懸念のためであったかもしれない。兎に角宗教という言葉は使わなかったが、最初から霊魂と肉体との関係、死生の問題等を繰り返し説いている。更に第三版以後では、前記 *Starting from Paumanok* を始め、*Song of the Open Road*, *Passage to India* 等多くの歌に宗教的な考えが充ち溢れている。全版を題じ宗教的目的に変りがないと述べているが、それは正にその通りである。その目的を離れなかった理由としては、先の第五版の序文に「この詩集の目的は人間性と宗教とにあり、宗教は人間生活の生命であること、化学と熱の関係の如くである、」と言っているところから頷けるであろう。

彼は初版から、個人の霊の尊厳を説いて、教会や書物に囚われず、自己を通して宇宙の真髄に触れることを勧めているが、「草の葉」は彼の所謂宗教の教本ともいうべく、それは魂の解放と救済の書なのである。彼の新しい宗教とは、人生と自然とについての彼独自の橋架けであり、道造りである。道ゆく人は自ら歩むべしとの態度をとっている。霊気に接するは孤独な自我のみ[1]とする彼であるから、彼に宗教を詳述した書物がないのは怪しむに足らない。

ホイットマンは一切は宗教のためであるとして、「全地球と天空のすべての星辰は宗教のためにある、／……（宗教なしには国家も男も女もその名に値しない）[2]」と言っている程、宗教を重視し、元来宗教心の深い詩人であるが、クエーカーに同情的であるという以外は、特に一つの宗派に属していたわけではない。特定の教会に囚われた既成の宗教に好意をもたなかった。例えば、「小さい子供の時であったが、驚いて口もきけなかった、／日曜毎に牧師が神の話をして、／それは或る存在、または或る力と闘うものだと言ったのを覚えている。[3]」とか、「服従、信仰、愛着性について、／離れて眺めている時、人間の大集団が、人間というものを信じない人々の導きに従って行くのを見る

と、気の毒に堪えないものがある。[4]」と牧師達への不信を示している。それで「一派の宗教を創める」というのも、囚われた宗教からの解放を希ったからであろう。

彼は表面だけの現実の政治や、文学、科学、芸術に対して、宗教は地球の不可欠な生命たる触知せられぬ火焔に等しいと見ている。[5]そして「私の僚友よ、／君と共に二つの偉大なものを頒ち合う、次いで更に包括的で一層光輝に充ちた第三のものが現われる、／『愛』と『デモクラシー』の偉大さ、それに『宗教』の偉大さが。[6]」と歌っている。

不可見の霊魂が、真の実在であり一切の根元であるという考えを先に見たが、これは霊魂、即ち神というに等しい。この考えを本として見れば、彼の宗教が如何なるものであるかを理解できよう。彼は終始汎神論的な神観を抱いており万物に神を認める。[7]普遍の霊魂を神と見れば、個性化された霊魂はいずれも神であって、私も神、君も神、万象が悉く神と見られる。彼は神の超越性と内在性とを同時に認めている。「草の葉」初期の間（第三版まで、即ち南北戦争前）はその内在面が強調され、次第に超越面が頭をもたげている。先ずその内在面の強調されている例を見よう。

私はあらゆる物象の中に神を聞きまた見る、しかも神については少しも理解してはいない、
また、私自身以上に驚くべきものがあろうとは思われない。
私が今日より更によく神を見ようと望む必要がどこにあろうか、
私は二十四時間中、どの時にも、どの瞬間にも神を垣間見る、
男や女達の顔の中に、また鏡に映る私自身の顔の中に、[8]

この驚くべき「神」こそ私であること、他の神々である私の愛するこれらの男女の間に立ち交ること、すべてが驚異である。[9]

この後者の例は「日没時の歌」の句で、今日、詩集後半の「別離の歌」詩群中に含まれているため、晩年の作と思い違いされるが、実際は第三版（一八六〇年、即ち南北戦争前）に出ているのである。次の句も第三版に現われている。

私がいろんな言廻しで説くところは何だと君は思うか、ただ男も女も「神」と同様だということ、
君自身より崇高なる神はないということだ。[10]

超越神としての面影は、南北戦争以前にも全くなかったわけではない。例えば「私の密会の場所は約束されている、それは確かなことだ、／『上帝』はそこにあって、完全な条件のもとに私がそこへ行くのを待つだろう、／偉大な『仲間』、私の憧れているまことの愛人はそこにいるだろう。[11]」というのがあるが、これは個我の霊が宇宙の霊に合流することを表わしているのであって、the Lord と一応超越神の如く扱いながらも結局、仲間として愛人に譬えているのである。しかし戦後は超越面が遙かに強調されている。

おお、神よ、私をあなたの栄光の中に浸し給え、
私と私の霊魂は、あなたの領域に加えられるように、あなたの所へと昇ってゆく。
おお、御身、超絶的なるもの、
名をもたぬ素質と呼吸、
光明の光明、多くの宇宙を産み出してその中心となる御身、
御身、真、善、愛のより大なる中心、
御身、道徳的、霊的源泉――愛情の根源――御身、貯水池、
（……どこかその辺に完全なる『僚友』たる神が、多分私達を待っているだろう、）

御身、脈搏よ――御身、星辰と恒星と諸宇宙の動因よ、
……
神を想えば、私は忽ち萎縮する、
「自然」とその驚異、「時」と「空間」と「死」とを想えば。[12]

同じく戦後の句で「宇宙人より宇宙神に捧げる頌歌」[13]という表現があり、また「民主主義展望」のなかでも、「新文学の樹立は神と人類へ仕える道である、」と述べているが、神を超越的に見る態度の強まったことがわかる。

しかしホイットマンの重病後（一八七三年）晩年に至るにつれて、超越面を無視しないが、再び内在面を強める傾向が加わっている。要するに彼の神観の動きは、多から一へ、さらに多と一の統一へと動いている。次の例は、ペルシャの老学者の語る所として彼が挙げているのであるが、当時のホイットマンの考えを映しているものと見られる。

『上帝』こそ一切万有です――すべての生命と物象の中に内在しているのです。
恐らく多くのものが、さらに多くのものが所を交えているかもしれない――しかし『上帝』は、『上帝』、『上帝』はそこに在ます。[14]

汎神論には一の強調により無宇宙論的立場をとる場合と、多の強調により一種の汎宇宙論的立場になる場合とあり、両者の間に幾多の段階も考えられるのであって、ホイットマンの年齢により多少の動きのあることは決して不自然ではない。いずれにしても彼は終始、神への信仰は絶やさないが、その神は教会に囚われた神ではない。デモクラシーの核心には宗教的要素があると説いても[15]、それは既成宗教の謂ではない。

宗派に囚われない彼が、キリストをどう見ているかは興味のある問題であるが、そのキリスト観を見るに恰好のも

のがある。「私の霊をあなたの霊に、なつかしき兄弟よ、／あなたの名を唱える多くの人々があなたを理解しないからといって、気にかけないで下さい、／私はあなたの名を唱えないが、あなたを理解しています、／……私達はあらゆる大陸と、あらゆる階級を包擁する者、一切の神学を認容する者です、」[16]と歌っており、キリストを一宗一派に偏しない人と見ているのである。またエホバ、キリスト、サタン、聖霊の四者を歌った歌で、聖霊の言葉として、「地上のあらゆる生命を包括し、神に触れ、神を包括し、救世主をも悪魔をも包括し、／空気の如くあらゆるものに滲透する、（なぜなら私なくして一切は何であろうか、神も何であろうか、）」[17]と歌っているのは、霊を離れて神のない所以を明らかにしているものである。

特定の宗派に偏しない彼は、建物や儀式に囚われることを嫌う。キャムデンの一公立学校の開校式に寄せた感想の中で、学校の建物と内容の関係について述べた譬えは、次の如きジオージ・フォックス[18]の言であった。「（この煉瓦と漆喰の積み重ね、この生命のない床や窓や手摺、これが君たちの教会と呼ぶものか、／これは教会でも何でもない——教会とは生きているものだ、永遠に生きている霊魂だ。）」[19] 彼はカトリック嫌いともいわれているが、一般の牧師や僧侶を蔑にする気はないと言う。「古今、東西を問わず、私はあなたたち僧侶を軽蔑しはしない、／私の信仰は信仰のうちの最も偉大なものであり、また最小のものだ、／古代と現代の、そして古代と現代の間にあるすべての礼拝を包含する。」[20]これは彼が、ゼウス、オーデン、梵天、仏陀、キリスト、アラー等諸神の存在を認め、彼らの存在していたことを、また彼らの時代においてなした業績を認め、その真価によってうけ入れると述べているのと同意である。そしてこの態度は、各種の宗教の存在を、宗教意識の発展段階における必然の現われと見るヘーゲルの宗教観と一致している。[21]

キリスト教国民としてホイットマン自身の信仰をその親近感から言えば、カトリックに最も遠く、クエーカーに最

も近いと思われる。クエーカー宗徒であった家から出た彼の母や、彼が少年時に父に伴われて聞きに行ったエライアス・ヒックスの説教が、強い影響を留めていると見るべきであろう。

見よ、一人の女を！

彼女はクエーカー宗徒の頭巾の下から眺めている、その顔は大空よりも晴れやかに、さらに美しい。(22)

(1) *Democratic Vistas.*
(2) *Starting from Paumanok*, 7.
(3) *A Child's Amaze.*
(4) *Thought.*
(5) *Starting from Paumanok*, 8.
(6) Ibid., 10.
(7) 汎神論については拙著「ホイットマンの心象研究」第九章参照。
(8) *Song of Myself*, 48.
(9) *Song at Sunset.*
(10) *Laws for Creations.*
(11) *Song of Myself*, 45.
(12) *Passage to India*, 8.
(13) *The Mystic Trumpeter*, 8.
(14) *A Persian Lesson.*
(15) *Democratic Vistas.*
(16) *To Him That was Crucified.*
(17) *Chanting the Square Deific*, 4.
(18) George Fox, (1624—91) 英国の説教者、クエーカーの開祖。

(19) *An Old Man's Thought of School.*
(20) *Song of Myself*, 43.
(21) Ibid., 41.
(22) *Faces*, 5.

八　哲　　学

ホイットマンの説くところは、いかにも loafer らしく、そこはかとなく、散漫に語られているようであるが、哲理に充ちた言葉が到る所に見出される。哲理に充ちたというのも曖昧な表現であるが、哲学という語が簡単に定義づけられないのであるから止むを得ない。哲学とは哲学することであると解すれば、たしかにホイットマンの教説の多くは、一応哲学の題下に収められても不思議はない。また実際問題として、多くの敬虔な哲学者に見られるように、彼の場合も、例えばその宗教と哲学とを截然と区別たてて論ずることは、殆んど不可能に近い。従ってこの題名は極く便宜的なものと解されたい。

ホイットマンは「自然と人生との橋わたしをする、」[1]と述べているが、これを手懸りにして彼の哲学は、自然哲学と人生哲学との融合を志すものと解釈することも可能であろう。直観を重んずる彼の世界では、認識論は棚上げされている。簡単に言えば存在論と倫理学の融合とも看做される。しかし元来彼は一つの体系の樹立を目指して、理路整然と論を進めるという型の哲学者ではない。直接、自然や人事に触れ、もの事の奥底まで考えを深めて真理を感得することの出来た哲人である。ただに真理を悟ったばかりでなく、これを説き、これを実践することに努めた哲人である。

考える人としての態度のうかがえる句は多いが、その二、三を拾えば「私はあらゆる哲学と宗教を再検討する、[2]」と明言し、「私はマンハッタンの街をさまよい、『時間』、『空間』、『実在』とについて――これらについてと並んで『思慮』について考える、[3]」と言う。また、「君は何のためにあるかを私は知らない、（私は自分が何のためにあるかを、また、いかなるものであれ、それが何のために存在するかを知らない、）／だが私はそれを求めて、注意深く探すつもりである、[4]」と述べている。そして「自己の歌」では早くも存在論的問題の提起を次々と行っている。例えば一人の子供に、「草って何？[5]」と問わせたり、「一体、人間とは何か、私は何か、君は何か、[6]」「この謎のなかの謎こそ『存在、[7]』」「理性とは何か、愛とは何か、さらに生命とは何か、[8]」「既知のものをかなぐり棄てて、私はあらゆる男女を私と一緒に未知の世界へと乗出させる、[9]」と歌う。

これらの問題に対する解答を彼は書物に求めない。彼は、

私の窓に咲く朝顔は、書物の形而上学以上に私を満足させる。[10]

と言って、論理的証明に頼らない。「論理学や説教は決して人を納得させない。／夜空の湿気が私の魂に深く泌みこむ。／（すべての男女に対して、自ら実証し得るものだけがそうなのだ、何人も否定し得ないものだけがそうなのだ、[11]」「偉大な法則は論議なしに受入れられ、また流れ出る、／私もそれと同じ型のものだ、私は彼らの友達なのだ、／……私は心を空しくして横わり、万象の美しい物語りや存在意義を聞く。／それらはまことに美しく、私はわが身を小突いて耳傾ける。[12]」「『空間』と『時間』！いまこそ私は私の考えていたことが真実であると知った、／私が草の上をぶらつきながら考えたことが、／私が独り寝床に横わって考えたことが、／また更に私が暁の薄れゆく星の下、浜辺を歩きながら考えたことが。[13]」

こうして彼が神秘主義の態度で悟り得たものは一体何であろうか。彼は「謎の歌」で、各人の心と生命の脈膊であ

り、むき出しであってしかも秘められたる実在として、詩人も彫刻家も画家も作品に描き得なかったものを彼は歌で挑もうとしていると歌っているが、それはすべての因で、最後の目的であり、すべて可見の宇宙はそれがために存在する天来の謎であると言う。彼は夜の浜辺に波の音を聞き、輝く星を仰ぎながら、

巨大な相似が一切を繋ぐ、[14]

と感得している。そしてそれは、すべての時と所のへだたりを、すべての有形、無形のもの、霊と肉、生と死、一切を橋架け渡し、しかも永遠に繋ぎ、維持し、包括するものとして、渺茫たる相似の存在を讃えている。この広大なる同質性の或るものは、即ち霊なのである。その霊を万象が頒けもつと見、しかもそれが不滅であると信じ、その上に万有が進化するとの信念が加わって、ホイットマンの根本観念たる汎神論的宇宙進化の思想となっている。

万有霊魂の思想は、霊を宇宙の本体として宇宙霊魂を考えれば、一元的な解釈が成り立ち、現象的に世界万象を考えれば多元的な解釈が成る。世界は一か多かの問題は、ホイットマンにあっては一即多として、水波不二の関係に捉えられている。本体を一にした現象個々間における平等無差別相は平等思想の母胎をなすことは既述の通りである。次の例の如きは万有霊魂の平等相に立脚してはじめて断言できる句であろう。

一片の草の葉も星辰の運行に劣るものではないと私は信ずる。[15]

君は、至上なものは唯一つしかあり得ないと思っていたのか、
至上なものは、幾らでもあり得るのだ。[16]

また、現象相互間に相則不離の関係を認めるのが、彼の関著な特徴となっている。所謂現象世界の連鎖的関係である。

各々が次のものと鈎がかりにつながれた果てしない鎖の輪、
各々はすべてに応えて、各々は一切のものと世界を頒つ。[17]
この連鎖観から、一切のものは全体の部分であるとの考えが当然に生まれる。
幾千兆の歳月も、幾億兆の空間も、宇宙の架け橋を危くし、また不安ならしめることはない、
それらは単に部分の集りである、一切のものは全体の一部なのだ。
いかに遠く眺めても、その外になお無限の空間がある、
いかに多く数えても、その周りになお無限の時間がある。[18]

このように連鎖は時間的にも空間的にも考えられ、更に関連の直接なると間接なるとは等価値に見られる。「男にしても女にしても、一日のうちに、一月のうちに、また直接の生涯のいかなる部分においても、或は死の瞬間にも、彼または彼女に影響する一切の行動は、／必ず先に到って、その人の間接の生涯を通じ彼または彼女に影響する、／……間接のものは直接のものと全く同じく価値あるものだ、／……一つの言葉、一つの行為と雖も、／……すべては生前におけるように、必ず死後にもその結果をもつものである。[19]」

同じ霊を頒けもつという前提から相互親近の牽引性が考えられる。現象相互間のみならず、本源と現象間の関係にも適用される。

いかに遠くともその神聖なる源泉へと帰ってゆく、
……
それはあらゆる原子における核心的衝動である、
同様のものが一つの例外もなく主体と客体のうちに潜在している。[20]

これが主客未分の超越境または主客統一の絶対境の土台である。「引力以上のものによる引力！／どうしてそうなのか私には分らない――しかし、見よ、他の何ものにも服従しないその或るものを、／それは攻撃的であって、決して守勢のものではない――しかも、何と磁石のようにそれは引きつけることか。[21]」

この絶大なる牽引性の力は、例えば生物間の愛となって現われる。彼は、あらゆる形而上学の基礎であり究極たるものは、人間同士の親しい愛、友人、夫婦、親子、都市と都市、国家と国家の愛、即ち、引力であると歌っている。[22]

精神的な愛は物象間の引力に相当する。それは譬喩的の関係ではなく、同じ霊の動きと見る。ホイットマンにあっては、物象と霊魂は別個の存在ではない。彼の次の如き物象礼讃賦はその前提に立っている。「私は『現実』を受け入れて、それを敢て疑わない、／そして徹頭徹尾唯物主義を滲み込ませる、／実験科学万歳！正確な実証万歳！[23]」「彼の思想は物象礼讃の賦である、／彼は神と永劫とについての議論では沈黙している／……彼は男女の人達の中に永劫を見る。[24]」「すべての真理はすべての物象の中に待機している。[25]」「私の自然の生命は忠実に物象を礼讃し、／永遠に物象の勝利を確証する、／……おお、物象の驚異――その最小の分子にも！／おお、物象の霊性！[26]」

物象礼讃の根元はその霊性にあることを明かにする。

変った難解な真の逆説を私は与える、
粗雑な物象と目に見えない霊魂とは一体のものである。[27]

諸々の現象よ、今でも、これから先でも、お前たちが何ものであるかを示せ、
汝、なくてはかなわぬ薄膜よ、霊魂を包みつづけよ、
伸び広がれよ、恐らくこれ以上霊的なもののない存在よ、立場を守れ、これ以上恒久的なもののない物象よ。[28]

彼の物象礼讃もこのように、結局霊魂を包む欠くべからざる薄膜としての存在意義による。彼は物心二元論者ではなく、唯心論者と見るべきであろう。

この唯心論者としての立場から見れば、彼の自我の強調も、極めて自然に理解される。

私の歌うただ一つの主題、偉大にして力強く把持する霊魂、それは私から逃れることはない、

「人の自我は決してくずれ消えることがあってはならない――それは窮極の実体だ――それは何ものよりも確実だ、

政治から、勝利から、闘争から、生活から、最後に残るものは何か、

見世物が終った時、「人の自我」を除いて何が確実なものがあろう。[29]

この立場を更に徹底すれば、

すべての建築は君がそれらを眺めたとき、君によって与えられたままのものである、

（君はそれが白か灰色の石材にあるとでも思ったのか、それともアーチやなげしの線の中にあるとでも思ったのか。[30]）

という句になる。彼にあっては自我の投射された対象の世界は、自我の延長拡大と見られ、自他の統一、主客不二の境地に到る。態度としては常に物と心の分け隔てはしない。

私は一切のものの観念をもち、一切のものであり、また一切のものを信ずる、私は唯物論が真実であること、唯心論も真実であることを信ずる、私はいかなる部分をも拒否しない。[31]

この一切のものを信じ得る態度は、典型的なプラグマティックの態度であって、やがてウイリアム・ジェームズが、そのプラグマティズム哲学樹立に際し好範例として引用しているところである。[32]

ホイットマンの哲学について語るとすれば、当然先人の影響を検討すべきであるが、これについては拙著「ホイットマンの心象研究」第九章に「先哲との関係」という項を設けてあるので参照されたい。ただ初期と後期にそれぞれ彼が最も関心を示した二人の哲学者については一言繰り返したい。

先ず彼にはエマソンの超絶主義的思想の影響が極めて強く、彼自身、青年時代にエマソン熱にとりつかれて、紙上ではあるが master（師）と呼んだことがあると認めており、[33] 事実エマソンの楽天主義、民主主義の弁護、個人への信頼感、独立自尊の強調、教会制度よりも個人の内観を重視する宗教観などは、そのままホイットマンに受け継がれているとも見られる。ことにアメリカ独自の文化を持てと提唱するエマソンの「アメリカ学者」の雄叫びは、ホイットマンによって実践の第一歩が踏み出されたと見られるので、エマソンが「草の葉」を手にするや否や讃辞を呈したのも当然であり、この両者の関係の深いことが解る。

しかし晩年彼が最も共鳴したのはヘーゲルである。ヘーゲルこそ近代最高の叡智であるとして礼讃の辞を惜しまなかった。ことにその神観や宇宙観に強く共感を表わしている。ヘーゲルは周知の如く、宇宙は自然人事を通じて根本実在たる絶対精神の論理的弁証法的発展であるとしているのであるが、ホイットマンもこのヘーゲル宇宙観を次のように伝えている。「全世界は過去、現在、未来を問わず、また物質と精神、自然と人事のすべての対比をもこめて、創造的思惟の無限なる過程における異なった発展の階梯或は鎖環である。諸現象の矛盾撞着と見えるものは、中心の強固な統一原理である永遠の目的によって結ばれている。そしてその目的とはあたかも百川海に注ぐように、一切のものが着実に善に向って進んでいることである。[34]」この考えがいかにホイットマン自身の抱懐していた宇宙観と一致しているかが解るであろう。ヘーゲルの絶対精神を、ホイットマンの霊魂で置きかえれば容易に納得がいくのである。ホイットマンが少くも晩年には近代ドイツ理想主義哲学に最も親近感をもっていたことは間違いなく、「私はドイツ

哲学の詩的代表である。」[85]とさえ言ったこともある。

このように右の両者には関係が深いが、いずれにしても彼は例えば、エマソンの単なる追従者でもなく、またヘーゲルの模倣者では全くない。影響や類似の点が多いとしても、オリジナルなものを豊かに持っている点には変りない。本稿では先哲との関係はこれにとどめて、次に同時期または後期の哲人との関係を一瞥しよう。

さきにホイットマンの根本観念たる汎神論的宇宙進化の思想について述べたが、これに関して、進化論哲学の樹立者ハーバート・スペンサー（一八二〇――一九〇三、「第一原理」一八六二）の説を見よう。スペンサーは現象の奥なる宇宙の真実在は不可知的なものであると見ている。そして現象構成の要件として物質不滅、運動の継続、力の固在性の三者を考え、そのうち力の固在性をもって究極的のものと見た。この力の固在性とは予め存在し、量的にも変化しないものの意味であって、それは自己存在的であり、無極であり、絶対であり、無条件的実相である。従って分析や認識を超えている。即ち科学的批判を超えており、不可知である。この不可知者の継続的存在、即ち運動の継続、それによる形態変化を進化と呼ぶのであるが、彼は実在は進化するあるもの（力の固在性）であるという。ここまで見るとスペンサーは物質だけのことを論じているようであるが、彼は精神といい物質というも結局不可知的実在の象徴に過ぎないとして、精神的である以上に物質的なものもなく、物質的以上に精神的なものもないと言っているが、これはホイットマンの霊肉一致の考えと等しい。

こうして見ると、力の固在性、物質不滅、運動の継続は、そのままホイットマンの万有霊魂、霊魂不滅、宇宙進化の根本観念に相当する。即ち不可知なる力の固在性の或る力は、ホイットマンの霊魂に当る。スペンサーは宇宙のあらゆる現象は、天体も生物も人間社会も、同一原理の再現に過ぎないという。ホイットマンにおいて一切は霊魂の顕現たるに等しい。ただスペンサーの進化論は、学者のこととて、極めて理路整然と系統立てて分析的に説明されてお

り、各部門ごとに、その集中的進化、分化的進化等を詳細に説いている。その分析の徹底的な態度が災して、全体を貫く動きが感ぜられない。この点を衝いてベルグソン（一八五九―一九四一、「創造的進化」一九〇七、松浦孝作訳）は、「スペンサーの進化は名称のみであって真の進化論ではない。既に進化したものの断片をもって進化を再構成しても無駄である」と酷評している。

これに比べると、ホイットマンの場合はもとより系統立った説は与えられないが、しかし前述のように、鉱物界、植物界、動物界の各階梯を通って人間の進化して来た跡が充分に描かれている。各階梯を通じて霊の不滅性を主とした進化の観念が与えられている。即ち縦に流れる霊の表現が進化である。従ってホイットマンには、霊の行進、魂の旅、魂の航海というイメジが到るところに現われている。このことは、霊は生命の原理であるから結局霊の行進とは生命の躍進と同じ意であって、この点において創造的進化を説いたベルグソンの「生の躍進」(élan vital) を早くも歌い上げたものと言うことが出来る。

ベルグソンは、生長した有機体を媒介として、胚種の一世代から次の一世代へと移りゆく生命の本源的躍進の観念を抱いており、この躍進は進化の多くの線上に相分かれて続いているが、それが変異の根本原因であるとし、結局、世界の実在は絶えず創造しながら動いてやまない生命（内的圧力、衝動）ではないかと言っている。そして彼はこの実在たる生命を瞥見せしめるものとして愛情の存在を説いている。「生物を支える見えざる生命の息吹は束の間に現われるのであるが、時々吾々の眼に姿を見せることがある。大部分の動物に顕著で感動的な母性愛、植物がその種子の撒布に対して抱く配慮にすらみられる或る形式の母性愛の前には、吾々はこうした突然の黙示を感ずる。或る人々に生命の大神秘をみせたこの愛情が恐らく吾々に生命の秘密を手渡すものであろう。」と、また「各世代がそれに続く世代にそれぞれ繋がっていることを愛情は示している。生物は主として通路の軌跡であり、生命の本質はそれを伝

達する運動の中にあることを愛情は瞥見せしめるのである。」とも述べている。

ここでホイットマンの「自己の歌」第五節で、草の上に横わり、自己と自己の霊との殆んど性的な交わりとして描かれた場面を思出さずにはいられない。そこでは彼は忽然として論議を超えた智慧が湧き、神の霊は彼自身の兄弟であり、万物は兄弟であり、万有創造の内竜骨は愛であることをさとる。そして野辺をおおう際限なき草や、その下蔭の穴に巣喰う蟻どもは、この愛によってはてしなく生まれている趣が描かれている。これは実在たる霊を愛として直観的に悟る場面である。即ち進化の要因たる生命、躍進する生命が彼にその姿を示した瞬間である。

ベルグソンは「霊は生命が個体に分れた細流である」と言っているが、それはホイットマンの場合の個体化した霊に当る。霊即生命という点では両者に変りはない。実在を霊と呼び、或は生命と呼ぶも、その進化するものである点において両者の考えは同一である。しかし進み方に違いがある。ホイットマンには、アリストテレス以来の所謂生命の三段階、植物的、動物的、人間的と順次継起的に見る考えがある。即ちラマルク（一七四四―一八二九、フランス人、進化論の先駆者、因みにダーウィンの「種の起因」は一八五九年）の単系統的進化論に近い。ベルグソンは、生命の波が四方に拡がるように分化的に見ており、従って、植物的、本能的、理性的と同一傾向の相継起的三段階と考えるのは迷妄であると言い、例えば動物の本能は人間の知性の劣等なものとは見ない。これは一つの活動が生長するにつれ分離した三つの異なる方向にすぎない。これらは程度の差ではなく質の差異であるという。尤もホイットマンにあっては、たとえ程度の差であっても、また質の差であっても、それが発展途上必然の段階であれば、その一切を肯定するので、その間に優劣をつけて考えることはしない。殊にホイットマンは本能、それにもとずく直観を極めて重視している。

ベルグソンは、ものを知るには知性によるのと、本能によるのと二つの行き方があるとした。知性をもとにして分

析するのは科学的の方法であって、それではものの外的知識を得るだけであるが、本能にもとずき直観的にものの中に入って本質をつかむのが哲学だとして直観を重んじている。またベルグソンは直観は共感であるという。そして共感し得るものは少くとも一つある。それは自己である。自己は生命の具現である。生命の把握は自己の凝視に始まるべきであるとして、彼の「創造的進化」の第一章冒頭は「吾々が最も確信し、最もよく知っている存在は疑もなく吾々自身の存在である。」と、先ず自己を内的に根本から知覚するというので始めている。

ホイットマンが「自己の歌」をもって「草の葉」を始めた真意もそこにあったであろう。「草の葉」はベルグソンにおいて良き解説者を得たと見ることができる。結局ホイットマンは自己の生命を通じて、永遠の生命、即ち宇宙の生命に思いを致し、これを象徴するために、その生命の流れに浮く個体の生長の姿を、*Starting from Paumanok* から始め、*Parting Song* に終る人生、人の一生の形にまとめている。しかしもとより、ロングフェロー歌うところの「人生の讃歌」という一生ではなく、永遠の生命の讃歌なのである。

最後に、ウイリアム・ジェームズが十七才も年下の異国の後輩ベルグソンを激賞したことは哲学界の友情美談として伝えられているが、そのジェームズがホイットマンをよく理解していたという事実は、ホイットマンとベルグソンの間に共通の因子の存在していることを暗示するものである。

(1) *When the Full-grown Poet Came; Passage to India*, 5.
(2) *Song of the Open Road*, 6.
(3) *Song of Prudence.*
(4) *To a Foil'd European Revolutionaire.*
(5) *Song of Myself*, 6.
(6) Ibid., 20.

(7) Ibid., 26.
(8) Ibid., 42.
(9) Ibid., 44.
(10) Ibid., 24.
(11) Ibid., 30.
(12) *Who Learns My Lesson Complete?*
(13) *Song of Myself*, 33.
(14) *On the Beach at Night Alone.*
(15) *Song of Myself*, 31.
(16) *By Blue Ontario's Shore*, 3.
(17) *Salut au Monde!*
(18) *Song of Myself*, 45.
(19) *Song of Prudence.*
(20) *A Persian Lesson.*
(21) *A Song of Joys.*
(22) *The Base of All Metaphysics.*
(23) *Song of Myself*, 23.
(24) *By Blue Ontario's Shore*, 10.
(25) *Song of Myself*, 30.
(26) *Song at Sunset.*
(27) *A Song for Occupations*, 5.
(28) *Crossing Brooklyn Ferry*, 9.
(29) *Quicksand Years.*

(30) *A Song for Occupations*, 4.
(31) *With Antecedents*, 2.
(32) William James : *Pragmatism*.
(33) "Emerson's Books (The Shadow of Them)", *Notes Left Over*.
(34) "Carlyle from American Points of View", *Specimen Days*.
(35) Clifton Joseph Furness, *Walt Whitman's Workshop*, p. 226, note 138.